

## アジア研究教育ユニット（世界展開力・特別経費）2014 年度教育研究報告書

<b>事業課題名</b>	東アジアにおける日本哲学研究—国際学会での対話実践
<b>代表者名</b>	上原 麻有子
<b>事業概要</b> (600 字程度)	<p>本事業は、文学研究科・日本哲学史専修の現役学生3名、および専修の OD2名が、「第六回東アジア文化交渉学会」(<a href="http://www.sciea.org/">http://www.sciea.org/</a>)にパネリストとして参加するというものであった。</p> <p>まずこの学会での発表の募集にパネル参加として応募し、そこで採択された。文化間の交渉とそれを通じた諸文化の進展を目指す学会であったのだが、その中で「哲学」という部門における研究チームとして選ばれた次第である。</p> <p>パネルは「京都哲学と国際化」をテーマとし、OD1名が英語を使用した以外、他のパネリストは全員、日本語で発表した。研究発表という場における外国語による対話実践は、このように限られたものであったが、他の国々、文化圏からの研究者が多数、このパネル発表に出席し、日本の哲学に大いなる関心をよせ、様々な反応を示したと聞いている。このような意味で、今回の経験は、国際学会への参加が初めてである学生たちにとって、「異文化」、あるいは外国人としての「他者」を実感するものであったと言える。また、それは、自らの研究の仕方、研究活動の広げ方を真剣に考える、貴重な機会となり、さらには、どのようにして「他者」に日本の哲学を伝えるかという新たな問いに出会う場ともなった。従って、対話実践という目的は、とりあえず果たせたと思われる。</p> <p>本事業の準備について一言述べておく。水野先生(京都大学非常勤講師)が引率代表を務め、東アジア文化交渉学会の情報を常に学生たち、および事業代表者に提供する、旅行手配や事務処理に関して学生たちを指導しまとめるなどの仕事をすべて引き受けて下さった。</p> <p>アジア研究教育ユニット支援室の駒崎さんには、事業の準備段階から帰国までの間、旅行手配、あるいは各種の書類の作成・提出方法について、懇切丁寧なご指導を頂いた。そのお蔭で、学生たちは、異文化体験、国際学会での初体験のほか、実務に関しても深く学ぶことができた。</p>
<b>成果の概要</b> (800 字程度)	<p>参加した学生・OD の全員が、今後も国際学会に参加する必要性を認め、また積極的に参加したいとの感想を述べていることから、本事業の成果は大いにあったと言えるであろう。</p> <p>日本哲学研究が、近年、国内外で盛んになってきているところで、学生・OD の国際感覚が芽生え、また明らかに研究意識が高まり、アジアをはじめとする海外の研究者との対話実践の重要性は、彼らに十分認識されたようである。</p> <p>今年度の演習などを通して、この参加した学生たちの発言の仕方や、授業に臨む態度にも変化が見られる。国際学会での多国籍・多文化の研究者たちとの接触により、かなりの刺激を受けたことは確かである。それは、すでに授業態度や研究態度にもよい意味の変化として現れている。</p> <p>外国語の使用についてであるが、今回は、OD1名による英語の発表があったほかは、すべて日本語であった。しかし、参加学生たちはみな、次回は外国語で発表したいという意欲を示している。</p> <p>以上のように、参加者が多くのことに気づき、研究上の態度に変化が現われている。これは、日本哲学史専修所属の他の学生たちにも影響するものと思われる。是非とも、年一度の国際学会での発表という事業は継続させ、本専修所属の学生たちの研究環境の国際化と活性化、そして研究態度のさらなる向上につなげてゆきたい。</p>